

ティーチング・ポートフォリオ

大学名 東京都市大学

所属 共通教育部 外国語共通教育センター

名前 杉本裕代

作成日 2021年8月16日



1. 責務

外国語センターの教員として、1年生必修科目 **Communication Skills (1)(2)** および、2年生以上の選択必修科目 **Critical Listening(2)(3) Test Taking Skills (2)** を担当している。英語科目はレベル別クラス編成のため、基礎レベルと上級レベルまで幅広く担当している。また、統一カリキュラムの統括として、CSの科目代表者および、TOEIC実施WG、TC教務担当をしている。外国語共通教育センターの専任教員として、各授業のみならず、統一科目のカリキュラム立案・運営、非常勤の先生方への対応なども担当している。

サークルで「アカペラ・サークル **Groove**」の顧問をサークル創設時から担当。今年度は実施できませんでしたが、他教員との共同担当で、「ポスト3. 11を考えるゼミナール」および「科学体験教材開発」を共同担当した。

2. 理念

私は、現代の日本社会における閉塞感や孤立に対して強い危機感をもっており、大学教育を通じて、学生たちがそうしたネガティブな状況を少しでも回避し、ひいては、その解決のヒントを生み出す人材になってほしいと思っています。

そのためには、自分が所属する社会について考える知識や論点を提供し、社会の一員であると帰属意識をもつこと、他者とのつながりのなかで寛容さを保つことを伝えたいと思っています。

そのために、東京都市大学の外国語教育の担当者として、まずは、学生が、自己表現の楽しさを知り、自己肯定感を、語学学習や異文化理解を通じて高めていくことを目指しています。学生が深く考え、その意見を明快な英語で表現する成功体験を積めるようにしています。

3. 方法

自分の言葉で実感を込めて（英語）語ることを目標に、個々人の活動量が多くなること、また、自分の実感をこめた表現になるような授業内活動を実施しています。具体的には、授業活動に演劇性を取り入れ、役を通じて、様々な自分のペルソナを発見する手伝いをしています。また、「平易な英語を何度も使う」という反復運動（エクササイズ）として、語学授業を行うことを意識しています。

- ・語学の問題はスキルではなく、話したいことの中身だという意識になってもらう。
- ・スキルに授業のフォーカスが向かいがちななかで、文学・文化の題材を通じて、異文化理解の視点を学生と共有し、言語で表現する楽しさを実感してもらうようにしたい。
- ・文章を読むことの大切さを伝える
- ・自らの英語に自信がなく、自己肯定感の低い学生の意識が変わるようにしたい。

具体的な方法

- 同時代の教材使用と足がかり：一口に英語学習といっても、語彙や文法の知識がないと「不正解」になるという図式が生まれやすい。適切な足場を提供することによって、「使える英語」「英語を使える」という実感を生み出そうとしています。

具体策：映画の一場面を再現（演劇形式）、アフレコ録画や、発音練習ゲームなど、授業内の活動を定番化した。また、学年共通の Webclass のオリジナル語学教材を作成し、突然のオンライン環境の中でも、学生の五感を刺激する教材で、全体の授業の質の向上に多少貢献できた。

- 学生を支援する：アカペラサークル Groove は、サークルの設立時から顧問をしており、今年のコロナ禍は、アカペラ活動には致命的な打撃がありましたが、学生たちと真摯に議論しながら、優先事項を整理しながら、2020 年度も恒例のイベントに参加できたことは大きな成果でした。

活動の実績：ソラマチ・アカペラフェスティバルへの練習監督および当日の引率

- ICT ツールと対面授業の混成：2020 年度は、遠隔授業のための情報収集と、授業リハーサルを行いました。関連書籍で情報収集しながら、アメリカで開催されていた PBL に関する講習会に 8 週間（週 1 回ペース）で参加し、アメリカの教員たちと意見交換ができ、オンライン環境にあまり同様していない教師たちに刺激を受けました。

- 英語による ZINE（小冊子）づくり

自分の好きなことを自由に発信する喜びを味わいながら、英語での発信を行うために、英語による ZINE づくりを授業で実践して、一人一冊、A5 サイズの小冊子を制作することを 2014 年から 2019 年まで実践してきた。

- ・英語を使えるという実感を獲得してもらうために、授業設計でも「自分もできそうだという実感」を授業設計の中に組み込み、学生の活動量を多くすることに努めている。

4. 成果

- 英語学習に精神的なハードルが低くなったというコメントが、どこのクラスからも出ていて、どの項目も 4 点以上であるので、まずまずかと思います。また、グループワークを積極的に取り入れ、見知らぬもの同士でも打ち解けられる工夫をしたので、クラス内で仲良くされたというコメントがあり、それは教員としてもクラスの連帯感のようなものを感じていたので、手ごたえを感じました。
- 嬉しい予想外の反応としては、「実際に使えそうな」英語や、「実際に使われている英語を学べた」というコメントがあり、いわゆる TOEIC や英会話の授業をしているわけではないですが、文化と

いうキーワードを通じて、私たちがいま生きている地続きの空間としての英語文化圏を感じてもらえたのだと考えました。

- 心理面の配慮のみならず、技術的な部分でも工夫したため、リスニングやリーディング作業を、個人がしっかりと行う環境が、対面の年よりも多く作れた。TOEIC スコアは上昇している学生が多かったが、一概に授業のせいだけとは言えない。
- Zoom や IT ツールを使うことで、ブレイクアウトルームなどの個室空間が増え、ある意味自分の理想に近い授業ができた部分もある。自分のアイデアを存分に試せたことは、対面の授業にも役立つと思う。

また、2020 年度以降は行っていないが、以下のような地域貢献と語学学習を関連づけた活動を行ってきた。

- ・せたがや国際メッセ「世界の子どもと言葉と仕事」(2018 年) 招待講師
- ・せたがや国際ラウンジ 特別連携企画 世田谷区立尾山台小学校 4 年生 「レッツ ディスカバークザ ワールド」ポスター展示・トークセッション (2019 年) コーディネート
- ・世田谷区立等々力小学校 1 年生対象英語ワークショップ 2016 年から 2019 年
- ・世田谷区立中央図書館 「ぬいぐるみおとまり会」 コーディネート 2016 年から 2019 年

5. 目標

2021 年度は、その方法をより洗練させ、説明資料などを充実し、完成度を上げたい。また、その授業内活動が、どんな英語スキルの発達を狙っているのかを明確に学生に示すことに、より力を注ぎたい。それによって、学生の自立した学習（英語トレーニング活動）が増えることを目指したい。

学生が内的に発話したいと思うきっかけづくりの機会を、文学や文化に関する教材を作成し、そこから、実感のこもった英語を体感してもらえるように授業設計を行いたい。

【添付資料】

授業の回答例

英語の ZINE（作品の写真）